

国語

## 読者反応を高め考えを形成する力を育てる 読書指導に関する研究

-リテラチャー・サークルやオンライン読書紹介を通して-

横芝光町立光小学校教諭（前横芝小学校教諭） はやかわ ゆうま 早川 祐真

国語科の読むことの学習指導では、教科書教材を中心とした読解技術の習得に重きがおかれ、読書活動を充実させ読者反応を育む指導が十分ではないという問題がある。そこで、本研究では、小集団での読書活動、児童の読書実態をふまえ、カリキュラムとして考えた読む本の選書、児童中心の読書コミュニティづくり等の授業を通して、読者の本を読んで反応する能力を高め、読書生活を豊かに営む態度を育むことを目指した。リテラチャー・サークルによる読書活動やオンライン等による読書紹介を行った結果、主体的に読書に取り組む態度が認められ、読者反応が高まり、考えを形成しながら読む力を育むことができた。今後も地域図書館との連携を深め、地域の読書活動を推進していきたい。

社会

## 地域に見られる社会的課題の解決を目指した学習活動を通して、地域社会の一員としての自覚を養う社会科学習

白井市立清水口小学校教諭（前印西市立いには野小学校教諭） おおかわ まさと 大川 征人

令和4年度全国学力・学習状況調査の結果から、「人の役に立ちたいが、実際に地域や社会をよくするために考えることは少ない」という児童の実態が明らかになった。変化の激しい現代社会において、身の回りにあふれる社会的課題の解決を目指そうとする意識、ひいては地域社会の一員としての自覚を養うことは重要である。本研究では、文化財の保存・継承という社会的課題を自分事として捉え、文化財との関わり方を考えさせることを通してそのような自覚を養うことを目指した。

社会的課題を取り上げた学習活動による地域社会の一員としての自覚を養うことの有効性について、研修会等で県内の先生方に広めていくとともに、今後も追究していきたい。

算数

## 統計グラフを読み取る力を育成するための指導の在り方

-グラフのかきかえ、問題作成、問題解決の学習活動を通して-

一宮町立一宮小学校教諭（前白子町立関小学校教諭） よしはら しんじ 吉原 慎司

日常生活の中には、誤解が生じやすいグラフが用いられている場合があり、児童はグラフを一面的にしか捉えず、情報を誤って理解することがある。そこで本研究では、第5学年、第6学年において、誤認しやすいグラフを正しく読み取る力を育成することに焦点を当てた単元を新設し、「グラフのかきかえ」「問題作成」「問題解決」という一連の活動を設定し、検証授業を行った。その結果、1目盛りの大きさや縦軸の範囲を変える活動は、グラフの形にだけ捉われることを防ぎ、誤認しやすいグラフを正しく読み取ることに有効であることが分かった。今後は、本研究で得た成果を研修会等で周知していくとともに、どの教員も授業で活用できるよう内容の改善に努めたい。

理科

## 小学校4年「空気と水の性質」における 質的・実体的な見方を育む理科授業

船橋市立薬円台小学校教諭（前高根東小学校教諭） まつした いおり 松下 伊織

“見方が育まれば、見えるものが増えて世界がもっと楽しくなる。”という思いから、物事を捉える視点である「理科の見方」を育みたいと考えた。

本研究の目的は、児童に「理科の見方」における、物質ごとの性質やその変化を捉える『質的な見方』と、見えないけれどもあると捉える『実体的な見方』を育むことである。そのための手立てとして、①見方を意識付けること、②粒子概念を用いて考えさせること、の2つが有効であることがわかった。

このことから、小学校4年「空気と水の性質」の授業において、教員は上記2つの手立てを実践し、『質的な見方』と『実体的な見方』を育むようにしてもらいたいと考える。

音楽

## 思いや意図をもって表現し、主体的に学ぶ児童の育成 -音楽づくりにおける音・音楽の「可視化」を中心に-

船橋市立金杉台小学校教諭（前咲が丘小学校教諭） さとう まいこ 佐藤 麻衣子

児童が自ら「音楽表現を工夫してみよう」と意欲をもてるような主体的な学びを促すためには、音楽を形づくっている要素などの働きや、それら进行操作する方法を理解させる必要があり、音や音楽の「可視化」による具体化が理解の支えになると考えた。本研究では「視覚と聴覚の両面から音楽を捉えることができる」というICTの利点を生かし、小学校第5・6学年の音楽づくりにおいて音楽作成ソフトを用いた可視化を行った。検証を通して、可視化が理解や思考整理の支えとなること、協働的な学びを促すことが明らかになった。今後は、本研究で得られた成果を広めるとともに、対象や領域を広げることで、児童が思いや意図を表現する上での「可視化」の有効性について追究し続けていきたい。

体育

## ネット型の学習内容と学習過程の系統性の検討 -キャッチバレーボールにおけるオーバーハンドパスを簡易化した動きを手掛かりに-

松戸市立東松戸小学校教諭 きむら あきひと 木村 昭仁

本研究では、中・高学年を対象として、キャッチバレーボールにおいて、トスアップにオーバーハンドパスを簡易化した動き（肩より上から上げるトス）を取り入れた。その結果、4年生では、三段攻撃を成功させるために、オーバーハンドパスを簡易化した動きによるオープントスが有効であること、6年生では、クイックトスがブロックをかわすために有効であることに児童が気付くことができた。以上のように、児童らはトスの有効性に気付くとともに、知識及び技能を習得し、思考力・判断力・表現力を高めることができた。これには、「指導の個別化」と「学習の個性化」の考え方を取り入れた学習過程が有効であった。今後は、縦断的に検証を進めていくことで経年的な変化過程にも迫っていききたい。

## 現代的教育課題

## 日本語能力に課題がある生徒への指導の工夫

## -「JSLバンドスケール」を活用した授業の改善を通して-

木更津市立鎌足中学校教諭（前袖ヶ浦市立蔵波中学校教諭） はぎはら さおり 萩原 沙織

日本語支援が必要なJSL生徒は全国で増加中だが、居住地域が散在する市町村では日本語指導教員が不足している。加配があっても全てを取り出し授業にできないため、今後はどの教員でもJSL生徒の学習言語能力を把握できるスケールが必要だが、あまり普及していない。また能力に応じた個別最適な支援ができていない。加えて、国語科ではJSL生徒がもつ文化の多様性を生かすような授業がなされてこなかった課題もある。これらを解決するため、「JSLバンドスケール」でJSL生徒の日本語の発達段階を把握し、個別最適な支援を古典の授業に取り入れた結果、異文化を生かした授業を展開することができた。今後は研究で得た成果を研修等で提案したり、情報を発信したりしていきたい。

## 言語障害

## 言語発達に課題のある児童の言語表現力を高める指導

## -LCSAに基づく支援の検討-

市原市教育センター指導主事（前五井小学校教諭） やまもと ともこ 山本 朋子

言語障害通級指導教室にて通級による指導を受けている言語発達に課題のある児童の傾向として、ことばで表現することの苦手さと活動への抵抗感を感じていた。そこで、言語表現力向上への適切な支援について明らかにするため、LCSAの結果から指導の目標と方針を設定し、言語障害通級指導教室と通常の学級における支援を実施した。その結果、児童は自立活動で自分に適した学習方法を身に付け自信をもつことで、通常の学級でも進んで考えを表現できるようになった。実践を通して、LCSAをアセスメントに用いる有効性と、双方の担当者が児童の実態と課題、支援の手立てを共有し、指導に生かす連携の重要性が確認された。今後は地域の研修会等に積極的に参加し、成果や情報を発信していきたい。

病弱・身体虚弱、  
重度・重複障害

## 病気の子供の学びをつなぐために

## -不安を安心に変える復学支援の在り方について-

県立四街道特別支援学校教諭 はらだ ゆり 原田 友里

病気の子供の学びの場は通常の学級を含め多様であり、それぞれの場で教育的ニーズに応じた支援・配慮が求められている。病弱教育を担う学校の教員と小中高等学校等の教員を対象に調査を行った結果、学校種間における教育的ニーズの捉え方には差異があり、その支援・配慮の視点の共有が課題となった。そこで、具体的な支援方法や配慮事項を細やかに共有でき、継続的な支援につながる復学支援ツール（試案）を作成した。また、入院中の教育は学習の遅れを補完するだけでなく、教員の関わりが子供の心の安定にとって重要な役割の一つであることが明らかになった。今後は、支援ツール（試案）の検討、活用をとおして病気の子供の学びが切れ目なくつながるよう復学支援を行っていきたい。

インクルーシブ教育

## ICTを利活用した居住地校交流の在り方について

### -小学校と特別支援学校の実践を通して-

県立栄特別支援学校教諭 きのした たけはる 木下 武治

特別支援学校に通う児童生徒にとって、居住地校交流は地域の友達と関わる貴重な機会である。研究では、ICT機器を利活用することによって、教員や保護者の負担を減らし、児童生徒の実態に応じて様々な交流ができる環境を作っていきたいと考えた。内容としては、ICTを利活用した小学校と特別支援学校の居住地校交流について、授業実践、インタビュー調査を実施し、成果と課題について明らかにした。また、ICTを利活用したPDCAサイクルに沿った居住地校交流の効果的な進め方について検討し、「ICTを利活用した居住地校交流サポートシート（試案）」を作成した。このサポートシートを活用することによって、ICTを利活用しながら、教員同士が協働・連携して居住地校交流を進められるようにしたい。

特別支援教育課題

## 知的障害特別支援学校における理科や 社会科の評価方法について

県立香取特別支援学校教諭 もとみや く に ひこ 本宮 久仁彦

知的障害の実態の幅が広い生徒集団に対する、理科や社会科の一斉指導において、目標に準拠した評価を行うために、単元ループリックと単元ループリック作成の手順の開発を行い、単元目標の明確化や、学習評価と授業改善からなる単元における指導と評価の一体化を図式化した。生徒の知的能力の実態別グループごとに、評価方法や目指す生徒の姿、具体的な言動を明確にすることで、学習評価と授業改善を行うことができ、単元ループリック作成の手順と、それに基づいた単元ループリックの有効性を示すことができた。今後の実践を通して、学習評価と授業改善の一層の充実に努め、研究の成果を生かして生徒が「分かった」と思える授業づくりに取り組んでいきたい。

企業等派遣

## 派遣企業における 組織マネジメントの手法の追求

横芝光町立上堺小学校校長（前山武市立大平小学校教頭） わかうめ たかひろ 若梅 孝篤

令和2年3月から始まった臨時休校。新型コロナウイルス感染拡大防止のための措置として取られた緊急事態宣言により、社会生活や学校生活は大変な苦労を経験した。リモートワークやテレワークといった新しい働き方が生まれる中、対面での接客により成り立つホテルポートプラザちばの損失は大変大きなものであった。ようやく社会も落ち着きを取り戻しつつある昨今、宿泊業を始めとする観光業界も徐々に活性化しつつある。お客様に安全安心なサービスを提供するための日々の企業努力や組織マネジメントは、学校経営に通じるところが多分にあった。「人にしか成し得ないサービス」を提供するホテルでの研修を参考に、「人にのみ成し得る教育」を行っている学校組織の活性化に生かしたい。